

随想

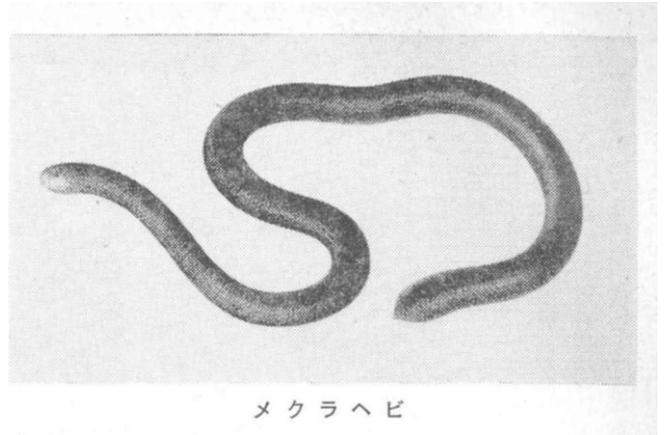
巳年の反省

松本邦夫(理学博士・岡山大学教授)

日本内地にはいないが沖縄から台湾、更に南方にかけてメクラヘビという長さ15センチばかりの小さな蛇がいる。ミミズのように土の中にばかりすんでいるので目がすっかり小さくなっているが、決して盲目ではない。蛇としては原始的な種類で、腰のところに骨盤の痕跡を残しているから、蛇のご先祖が足をもっていたという生き証人の蛇でもある。

ところで、おかしなことにこの蛇はいくらさがしても雌ばかりで雄が1匹もみつからない。私も台湾時代に随分採集したし、気もつけていたのだが、とうとう雄にはお目にかかれなかった。戦後出版された京都大学中村健児教授の著書にも「雄はついに発見されなかった」と明記されている。この蛇を解剖して見ると、もち米を少し大きくしたような卵をもっているのだから、ほかの蛇と同じように卵を産んで繁殖することは間違いないらしい。それなのに雄がみつからないので、ノミの夫婦式に男性がすごく小さくて、一緒にいても見のがしてしまうのかもしれないとか、雌雄の形があんまり違うので、雄の方は別の種類と思われているのかもしれないなどと随分頭をひねったものである。人間ならば御主人のいないはずの娘さんや未亡人が子供を産んでもちっとも珍らしくないご時世であるがメクラヘビにはそんな結構な趣味があるはずがない。

ところが数日前発売された雑誌「自然」の12月号にソ連の動物学者タレフスキーの研究を紹介した興味深い記事が出ていた。原著を見たわけではないが、カスピ海と黒海にはさまれたカフガス地方にすむトカゲの一種が雌ばかりだというのである。彼等はこの謎を解くためにいろいろの方面から研究を進めた結果、おどろいたことに、このトカゲは雌だけで卵を産み、その卵からまた雌ばかりが生まれてくるというまったくの女護ガ島、むつかしく言えば単性生殖をやっていることが判明した。うまれたば



かりの子供を1匹ずつに分けて飼っておいてもその1匹が卵を産み、卵からは立派に雌が生まれて来たというのだからもう疑う余地がない。まったく男性不要で、男ざらいどころのさわぎでない。単性生殖とか単為生殖ということはミジンコやアリマキのような下等動物では少しも珍しいことではなく、いづれも夏の間は雌だけでじゃんじゃん繁殖し、寒くなる頃には男の胸が恋しくなって雌雄の交尾で越冬卵を産むという例はいくらでもあるのである。

しかしこの場合はトカゲという歴とした脊椎動物である。トカゲといえば鳥や獣より僅かに1段階だけ原始的なグループで、体の中には同じ赤い血が流れ、内蔵なども一通り同じものがそろっている。そういう高等な動物が男性不要、女性だけでいくらかでも子孫が増やせますというのだからこれはセックスに対する1つの革命であり、男性の1人としても、動物学者としても大きなショックである。ましてつい先年まで、メクラヘビに雄がないと不思議がっていた者にとっては二重の大ショックである。トカゲで雌だけの単性生殖ができるのなら、その親類筋にあたるメクラヘビでもきっと単性生殖をやっているに違いないと思われるし、大至急調べてみねばならないことである。私たちは20年も前から、メクラヘビに雄がないとみとめながら教科書や学問上の常識にとらわれすぎて単性生殖の可能性

岡山畜産便り1965.01

まで考えてみようとしなかったわけで、そのうかつさに腹が立つやら、なさけないやら、近ごろは女の顔を見ても、ムカムカするような心境である。

かって故清水多栄岡大学長にいただいた色紙に「ことごとく書を信ずれば書無きにしかず」と書かれている。自然を相手の研究ではどんなことでももう一度疑ってかかるだけの研究心と積極性を忘れてはならないという反省である。

若しこのトカゲやメクラヘビの単性生殖がどんどん研究され、発生の神秘が解決されてくれば、ニワトリも雌だけ、乳牛も雌だけ、利用と繁殖が雌だけでどんどんできるという畜産界の革命だって不可能ではあるまい。雌だけの畜産、これは新年に画く1つの大きな初夢ではなかろうか。